

沖繩の歴史

読谷中学校 二年八組 葛原 妃夏例

沖繩が日本ではなかった時代があったことを、私は知りませんでした。沖繩復帰五十年。この節目のニュースを通して、私は沖繩がアメリカ統治下におかれていたことを初めて知り、お金の単位も円ではなくドルだったことも知りました。また、家族でよく行く「プラザハウス」が、駐留アメリカ軍関係者の消費ニーズに対応するためできたことも知りま

した。十三歳の私にとって沖繩は、生まれたときからすでに日本の中のひとつの県だったので、このことが当たり前でない時代があったことに、とても驚きました。

私たちは、毎年慰霊の日が近くなると、学校で平和について学びます。私も、慰霊の日には、大切にしなければならぬと感じています。なぜなら、私たちの住む沖繩には、沖繩戦の歴史があるからです。

私の親戚も沖繩戦で生き残りました。それ

も、子じ千りがマの惨劇の中、生き残ったそ  
うです。母の聞いた話では、周りの人が亡く  
なっていく中、命をフなぐことができたのは  
家族がいたからだと話してくれました。

私も少しだけ、親戚に直接話を聞いたこと  
があります。戦争って怖いのに、それが私の  
精一杯の言葉でした。戦争のことを思い出さ  
せってしまうかもしれない、聞いてはいけな  
い。このようは気持ちが悪かったからです。どのよう  
に何を尋ねればよいか分かりませんでした。

親戚は、詳しくは話してくれませんでした。  
子じ千りがマでの出来事は、それほど「重さ  
をもつ歴史なのだと思います。人に話すこと  
ができないほどの痛みや苦しみを、私たちは  
しっかりと理解し、伝えていかなければなら  
ないと思いました。

私は、平和学習を毎年し続けている限り、  
戦争が起こることはないと思っていました。  
それなのに、今、ロシアとウクライナでは、  
戦争が起こっています。そのニュースを毎日の

当たりにし、沖縄で戦争が起ころない保証は  
 どこにもないと分かりました。戦争が起ころ  
 たとき、その現場の悲劇だけでなく、物流が  
 ストップすることにより、周辺国にも影響  
 が及ぶことになり、影響は戦争をしている国  
 同士の間関係なくどまりません。

もし、再び、沖縄で戦争が起ころうなこ  
 とがあったとしたら、私は真に怖さを感じ  
 てるでしょう。そして、それと同時に、食事  
 の心配をすると思います。戦争は、楽しく安

全に暮らす生活を全て台無しにしてしまいま  
 す。毎日当たり前に、満腹になるまでごはん  
 を食べるのができなくなるかと続けていか  
 なければなりません。そういう小さな幸せを  
 申っていくことが私たちの責任なのではない  
 でしょうか。

沖縄が 復帰五十年や戦後七十七年目を迎  
 えたことは当たり前ではありませんでした。  
 これから先も、一年また一年と平和である年  
 月を重ねていくことができるように、私たち

